

最近の症例から（9） 静脈石をともなう血管腫

氣賀昌彦，山本雅也

松本歯科大学 口腔外科学第2講座（主任 山岡 稔 教授）

症 例 1

患者：66歳，男性

初診：平成元年10月18日

主訴：舌および口腔底の腫瘍

既往歴：16歳時，右側顎下部血管腫摘出術，3年前咽頭部ポリプ切除術の既往がある。

現病歴：10年程前より舌背部に腫瘍を認め徐々に増大傾向にあったが，他の自覚症状がないため放置していた。10日前，食事中に舌腫瘍部側縁を咬み，著明な出血を認め近医にて縫合処置を受けた。舌・口腔底部の腫瘍の精査，および処置のために当科を紹介され来院した。

現症

全身所見：体格中等度，栄養状態良好にて他に特

記すべき事項なし。

局所所見：右側顎下部に軽度びまん性の腫脹および同側下顎下縁相当部皮膚に手術瘢痕を認めた。舌背中央部に60×54 mmで暗紫赤色の色調をおびた弾性軟の腫瘍を認め，同部は圧迫により退色し無痛性であった。また，右側口腔底より同側歯槽基部にかけても12×28 mmの同様な無痛性，弾性軟の腫瘍を認めたが唾液は正常に分泌されていた（写真1）。

X線所見：右側小臼歯部より下顎体下顎角相当部におよぶ顎下部軟組織に石灰化像と思われる円形で直径2～6 mmの不透過像が20数個散在して認められた（写真2）。

臨床診断：舌・口腔底部血管腫

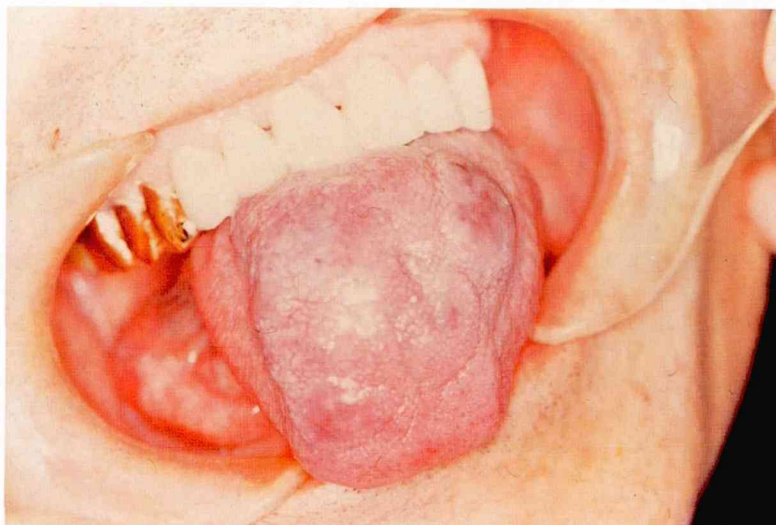


写真1

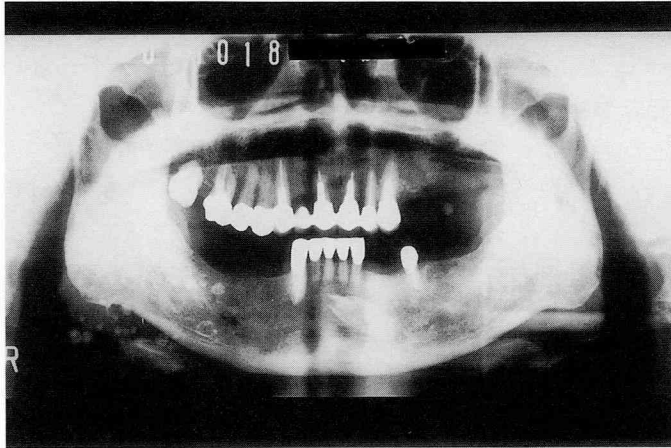


写真 2

症 例 2

患者：58歳，女性

初診：平成2年1月22日

主訴：11動揺

既往歴：昭和57年，頸部血管腫摘出術

現病歴：平成2年1月初旬，11の動揺を自覚したため某歯科医院を受診，下顎骨中心性血管腫が疑われ，精査および11抜歯を目的として当科を紹介され来院した。

現症

全身所見：体格中等度，栄養状態良好にて他に特記すべき事項なし。

局所所見：顔貌は左右対称性で左側頸部皮膚に手術瘢痕を認めた。11歯肉頬移行部粘膜に境界やや不明瞭な無痛性腫脹を認め，弾性軟で変色はみられず頬粘膜にも異常所見はみられなかった。

1は金属冠が装着され11は動揺度3度で，辺縁歯肉に軽度の発赤と軽度打診痛を認めた。

X線所見：左側下顎前歯部より下顎体下顎角相当部，頸部にかけての軟組織に石灰化像と思われる直径2～6mmの円形の不透過像が10数個散在して認められた（写真3）。

臨床診断：11慢性辺縁性歯周炎，口腔前庭頰部・頸部血管腫

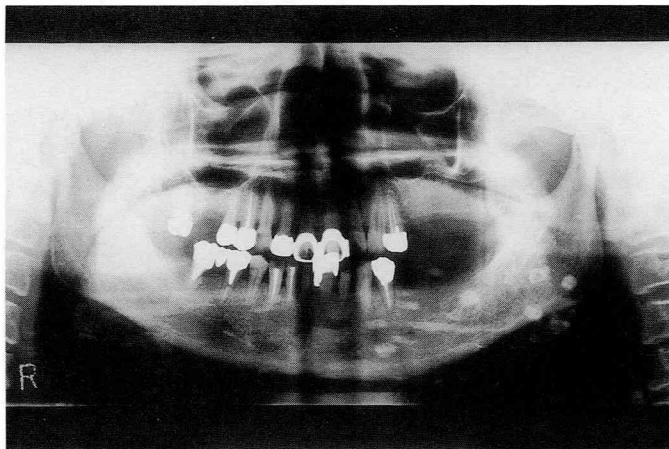


写真 3